カモンって言いたい

洞窟の入り口とかで

合川秋穂

何故暗がりの入り口には、引力があるのだろうか。ふと人を引き込むような魔力がそこにはある。この詩歌で頭を過ぎった歌。

ヘイ龍カム・ヒアといふ声がする（まつ暗だぜつていふ声が添ふ）　岡井隆

人はみな産道という暗がりを抜けてきた。私たちがどこから来て、どこへ行くのかという問題の原点のようなもの。洞窟の入り口にそういった魔力を感じたのかもしれない。

百合の花

切絵になれなかった紙

細村　星一郎

そうではないものに視線を向けることは詩の一つ手段である。そうであるものよりそうでないものの方が何故詩になり易いのだろうか。

切り絵になれなかった紙は実生活においてほぼ無価値で無意味なものである。意味や価値で判断される社会の中で、無意味で無価値なものが詩に与える輝きがある。

そこには価値の逆転がある。そうでないものにはそうであったかもしれないという無慈悲な可能性だけが付きまとう。

生活のうえで繰り返される選択において、常に人はそのような無慈悲な可能性を背負うことになる。切り絵になれなかった紙にはそういった儚さが光っている。

中山